

時間

十一月の中旬、帰りの会で担任の先生が言った。

「十二月のロードレース大会に向けて、来週から放課後の持久走が始まるから、みんな体調を整えておくように。」

僕は気持ちが悪くしりと重たくなるのを感じた。

郷原町では毎年十二月に小・中学生全員と一般参加者による町内ロードレース大会が行われる。僕の中学校では、大会に向けて二週間前から放課後に走り込みの練習が始まる。原則全員参加であるが事情がある場合は参加しなくてもよい。

「風邪を引いたみたいなので休ませて下さい。」

少し後ろめたい気持ちはあったが、僕はそう言って初日の練習を休んだ。受験を目前に控えて僕はあせっていた。昨日の個人懇談で担任の先生から希望校は難しいと言われ少し落ち込んでいたし、しっかり勉強するように励まされて、ともかく、毎日六時間は勉強するという目標を立てた。母も賛成してくれて、それまで僕の仕事だった朝の犬の散歩も免除してもらった。学校から帰ったらすぐに机について勉強をする決心をしたばかりだった。(何で受験生の三年生にまで練習をさせるんだ。部活を引退した意味がないじゃないか。)僕にはロードレースという行事があることすら、許せない気持ちになっていた。

「帰ったよ。」

「あら？今日から放課後、持久走じゃなかったの？」

母は何か言いたそうだったが、無視をして部屋へ直行した。

すぐに机について勉強をしようとしたが、気分が乗らずベッドに横になった。気が付いたら眠っていた。「夕ご飯よ。」という母の声に目覚め、食堂に降りた。

「どう、勉強はかどっているの？」

母の声に僕は無言でうなずき、さっさとごはんを済ませて、二階に上がろうとした時、テレビでバレーボールの世界選手権の中継が始まっていた。バレー部に入っていた僕にとって、それは見逃せない試合だった。

「母さん、これだけは見せて。」

僕はそう言ってテレビの前に座った。

「仕方ないわね。」

母はためいきをついた。その後、風呂に入って部屋に上がったら、もう十一時だった。それから机に向かったが、六時間の計画表を眺めて、何からやろうか考えていると、時間ばかりが過ぎていった。だからだとノート整理をしているうちに午前二時になっていた。結局、計画の半分も終わらないまま、その日は寝てしまった。

次の日の朝、いつもの犬の散歩をするため六時に起きたが、今日から姉がやってくれることになったのを思い出し、二度寝をして七時半に目を覚ました。そのためこの日は、ぼんやりとした頭のまま一日を過ごした。次の日も、その次の日も、風邪を理由に練習を休んだが、なぜか集中できず、あせりばかりが増していった。



そんな日が何日か続いたある日、練習を休んだ僕は、やはり勉強にも気持ちが入らず、夕方ぶらりと散歩に出かけた。

放課後の練習が終わる時間だったらしく、何人かの生徒がちょうど下校しているところだった。気まずく思った僕は、家の方に引き返した。そんな僕が保育園の脇わきを通り過ぎようとした時だ。クラスメイトの孝史が、保育園に通う弟の手を引いて出てくるのが目に入った。練習後すぐだったのか、服は体操服のままだ。

（確か、孝史の両親は共働きだったよな。）

放課後の練習に参加し、それから弟の迎え。家に帰ったら、弟の面倒も見えないといけないのだろう。勉強している暇もないのではないかと思っただが、一学期には自分より成績のよくなかった孝史が、二学期に入り、確実に結果を出していることを思い出した。

僕は、話しかけることもできず、ただ孝史の後ろ姿を眺めたまま、その場に立ちつくしていた。

次の日、放課後の練習に参加することを僕は先生に告げた。さすがに全く走っていないかのために、すぐに息が苦しくなった。そんな僕の横を、孝史が軽い足取りで走り抜けていった。それを見て、僕も力をふりしぼったが、最後には歩いていった。ほんの少しの運動ではあったが、体はぐったりとしていた。それでも、家に帰った僕は、その疲れた体を休めようともせずに、机に向かった。疲れはあったが、最近ずつともやもやしていた気持ちはどこかへ消え、勉強も妙にはかどった。

（どれだけできるかは分からないけれど、明日からもやってみよう。）

ロードレースまでは、あと一週間となっていた。

そして大会当日。走るのがもともと嫌いではない僕は、毎日の練習の成果もあって、快調にトップグループに食い込んでいた。ふと、周りを見ると、トップグループにいる同級生たちは、みんな勉強でもがんばっているものが多いことに気が付いた。

（それにしても、このロードレースのせいでも、どれだけ勉強時間をつぶしたか。今日は帰ったら、あれもしないと、これもしないといけない。ほんと、あせるよなあ。）

そう思いながらも、僕は、いつしか、あせりが自分から消えていることに気が付いていた。

（あと少しでロードレースは終わる。でも、僕自身の本当のレースはこれからだ！）

「ラストスパート！」

先生の掛け声に、僕は残った力をふりしぼって、ゴールに向かって走り出した。

